

障害児教育部会

今村 祥子

国語・算数・理科の実践講座と講演の一日

八月二七日、都教組障害児学級部との共催で、午前に三分科会、午後講演と、とても充実した学習会を行うことができました。

国語講座は、東久留米七小の吉田薫さんが「友だちと学び合い豊かなイメージを共有できる授業をめざして」と題し、こだわりの授業づくりについてお話してくださいました。たくさんの教材と実践報告から、心と頭がゴロンと動く授業をめざして「何といっても楽しい授業・友だち同士のかかわり合い共感し合う集団の学び・意味のある学び」の追究が大事であること、国語の授業に音楽を取り入れ、言葉を育む歌遊びやリズムに乗って聞いて楽しむことで心に言葉が残っていくこと、させるのではなく、子どものやってみたいくなる気持ちを育てることの大

切さなどを学ぶことができました。

算数講座は、三鷹市立高山小の中村朋子さんの算数の授業づくりについての報告でした。子どもの発達や障害の状態が均一ではない、教科書も指導書もない障害児教育に悩む先生が多くいらつしやる中、大事にしたい教材や系統性を丁寧に整理して頂きました。教師として学び続けていくことの大切さ、何を大事に私たちが子どもとまた同僚と向き合えばいいのかを考えることができました。

理科講座は、江東区立東陽小の市川広義さんの「季節を楽しみ、自然に働きかける授業を」と題してのお話でした。子どもたちの作品や写真を通しての実践報告は、「理科がもつ教科の強さは、子どもの力・仲間とかかわる力を育て引き出す」ところであることを改めて確認する

ものでした。金魚すくいから始まって魚の観察、鯉のぼり作りと発展する学習、二期始めにぴったりのおいしい学習、頭と身体を使って楽しむ理科工作など、早速使える学習教材は参加者も体験できました。

午後は、「子どもの発達に共感すると、きく実践を考えるための発達の視点」と題して神戸大学の木下孝司さんのお話を伺いました。障害のある子どもが自らを変えていく発達のプロセス、じっくり子どもと向き合い、子どもの発達に共感するとはどういうことか、理論と映像で実感することができました。特に、「問題行動」をどうとらえるのか、子どもの姿や実態を職員集団が討議し確認していくことで、対処ではなく、行動の意味をとらえ、様々な仮説をたて、大人の子どものへのかかわりが質的に変化していくことを、先輩たちの姿から学ぶことができました。今、発達障害から重い知的障害をかかえる子どもたちが混在する学級の難しさに深く悩む私たちにとり、大変意義深いものとなりました。

(渋谷・臨川小)